

# コアジサシ 英: Little Tern 学: *Sterna albifrons*

## 1. 分類と形態

分類: チドリ目 カモメ科

全長: 約24 cm  
 翼長: ♂168-187 mm ♀167-183 mm  
 尾長: ♂42-48 mm ♀39-46 mm  
 露出嘴峰長: ♂27.4-34.0 mm ♀26.2-32.3 mm  
 ふ蹠長: ♂15.6-17.8 mm ♀15.1-17.8 mm  
 体重: ♂50-63 g ♀44-68 g

※計測値はCramp(1985), Olsen&Larsson(1995) による

### 羽色:

雌雄同色。成鳥夏羽は頭と過眼線は黒く、上面は灰色。額と体下面は白。尾羽も白く、燕尾。嘴は黄色く先端は黒い。足は橙色。成鳥冬羽は額の白色が広がり、目元は黒い点のようになり、嘴、足は黒くなる。



写真1. コアジサシ。[Photoby 菊地健]

### 鳴き声:

ふだんは「キュイ」、ディスプレイ時は「キュルリ、キュルリ…」、捕食者が近づくと、集団で「キイツ、キイツ、キイツ」「クイツ、クイツ、クイツ」「キリキリキリ」などの警戒音で鳴く。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

ユーラシア大陸からオセアニアにかけて、世界中に広く分布し、7~9亜種に分類されている。10年ほど前に、アメリカ大陸の亜種が別種アメリカコアジサシとなった。日本で見られる亜種 *S. a. sinensis* は、東南アジア、韓国、日本などで繁殖し、オーストラリア、ニュージーランドなどで越冬すると言われている。日本には、夏鳥として本州以南に渡来し、繁殖する。ここ十年の繁殖北限は秋田県秋田市。

### 生息環境:

海岸の砂浜、河川の中洲、埋立地などで集団繁殖する。水田や沼沢、市街地の堀や池にも生息する。

## 3. 生活史



### 繁殖システム:

一夫一妻。1シーズン1回繁殖。2歳齢から繁殖が可能。

### ディスプレイ・ペアリング:

オスは魚をくわえてメスに近づき(写真2)、羽を少し広げ、嘴を上に向けメスの周りを回ったり、また魚をくわえたオスを1~2羽のメスが追いかける空中でのディスプレイなどがある。オスが採ってきた魚をメスが受け取るとペアが成立するが、オスはその後も営巣地への定着時まではもち



写真2. 魚を喰えたコアジサシ(左手前)。デコイ(右側3体)にアピールすることも。  
[提供 リトルターンプロジェクト]

ろん、抱卵前期まで求愛給餌を続ける。また、メスがペア以外のオスから餌をとるためのつがい外交尾が知られている(鳥羽1989)。

### 巣・卵:

腹で浅いくぼみを掘り、そこに巣材を敷くが、営巣環境により巣材は貝殻や草など様々である(写真3-1,2,3)。時には人間があつらえた場所に、卵を産むこともある(写真3-4)。卵はクリーム色~パフ色の地に、茶色や黒褐色の不規則な斑が入り、保護色となる。ウズラの卵とほぼ同じ大きさ。29.8-34.1mm × 22.5-25.5mm, 重量7.5-9.5g。一腹卵数は1~3個。卵が巣から70cmほど転がり出してしまうと、「自分の卵」という認識がなくなると言われている。



写真3. 性格が出る? コアジサシの巣と卵。

### 営巣環境・コロニーサイズ:

砂浜、川原、埋立地などの裸地で、植被率は5~10%以下、0.5ha以上で見通しが良い(たとえば盛り土になっていたり、捕食者が潜んでいそうな林などが無い)場所に好んで営巣する。コロニーサイズは数巣から数千巣まで様々。

### 抱卵・育雛期間:

抱卵期間は約20~22日でオス、メス共に抱卵する。ヒナが孵ると親鳥は卵の殻をくわえて捨てに行く。ヒナは早成性で、孵化後2日ほどで、巣を離れる。孵化後1週間くらいまでは、片親がヒナに寄り添い、日陰をつくったり、腹をぬらして、ヒナを冷やすこともある。また捕食者が来襲した際に集団でモビングする。

ヒナへの給餌は、孵化後1週間後ほどまでは片親が、それ以降は両親で給餌をおこなう。ヒナは、親鳥が魚を1匹ずつくわえて営巣地に戻ってくると、「ピピピピピ〜」と大きな声で羽ばたきながらアピールし、親鳥を呼ぶ。孵化後3週間ほどで飛べるようになる。

ヒナは親鳥を待つ間、日陰をもとめて、もしくは捕食者来襲でパニック!などで、頻りに営巣地内を移動するが、この際他の巣に少しでも近づくものなら、その親鳥に突付かれたり追いまわされたり、執拗なまでに攻撃をうけることがあり、孵化後まもない小さなヒナの場合、くわえられて営巣地外に捨てられる(運ばれる?) ことなどもある。

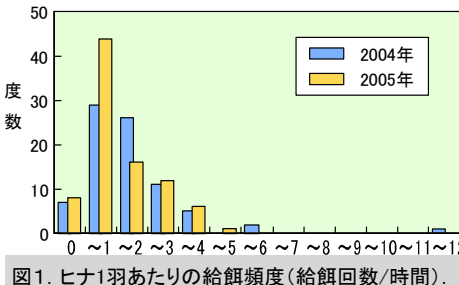
巣立ち後&渡り:

巣立ち後もしくは、まだ魚が採れないので、引き続き親鳥から給餌を受ける。東京湾岸では、8月中旬から9月下旬まで、毎年1千羽から1万五千羽ほどが集結し、遊休地や駐車場などをねぐらにしているのが観察されている。標識調査では、静岡県や千葉県九十九里浜で放鳥された幼鳥が東京湾岸に移動していることが確認されている。渡りのルートについては、どこを経由しているのかまだわかっていないが、琉球諸島・台湾・フィリピン諸島経由で越冬地へ渡っていると考えられている。

4. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● コアジサシの食卓事情

魚類が主要な餌であるが、海外の文献では水生昆虫の記載がある。採食は、ゆっくりとホバリングしながら探索し、魚を見つけると狙いを定めて急降下し、水中に飛び込んで捕らえる。干潟などの浅い所では、水面を掬うように飛ぶこともある。著者は2004~2005年に、コアジサシの食物条件に関する調査を東京湾岸で行なった。目視によるコアジサシの採食範囲調査では、営巣地周辺の6km以内を主に利用していることがわかった。育雛期は、魚を捕らえると飲み込むことなく嘴に1匹ずつくわえて、そのまま営巣地まで一直線に運んでいく。親鳥はヒナの孵化後3日ほどまでは、シラスなど2cmほどの小さな魚を、その後は成長に合わせて魚のサイズが大きくなり、孵化後3週間にもなると8cm弱の魚を給餌していた。給餌頻度は1時間あたり3回以下であることが多いが、1時間あたり12回もの給餌が観察されたこともあった(図1)。



直接観察による給餌魚種の識別が困難なため、親鳥が営巣地内に落としたり、ヒナが食べなかった魚を回収したところ、利用魚種は40種近くにのぼり、表層を群れを成して泳ぐカタクチイワシ、サツバ、コノシロ、マハゼの順に優占していた。珍しいものでは、サンマ、シイラ、イシダイ(小さいのに縞がしっかりあった!)等々。東京湾表層域の仔稚魚相調査でこれらの魚種が多く出現していることと合わせると、コアジサシは特定の魚を選好しているのではなく、表層魚の種組成をそのまま反映していると考えられる。

● コアジサシの保護活動の現状と今後の課題

環境省のレッドデータリストでは、絶滅危惧Ⅱ類に指定されており、日本のみならず世界各地で個体数の減少が報告されている(Wetlands International 2002)。個体数減少の原因として、①営巣適地の減少、②捕食者による繁殖成功の低下、③人為的攪乱などが考えられている。また、ヒナが早成性のため、正確な巣立ち率が把握できないこと

で、コアジサシの個体数推定が難しくなり、個々の原因がどのような影響を及ぼしているのか、詳しいことがわかっていない。さらに、これら以外にも、海鳥一般に共通する問題である餌条件を検討項目にくわえ、今後科学的に検証していく必要があるだろう。

このような背景のもと、全国各地で多くの市民団体や自治体などが保護活動に関わっており、東京湾岸だけでも5団体にのぼる。保護活動は多岐にわたり、①「営巣適地の減少」対策では、毎年、営巣適地となる空き地の出現と消滅にやきもきし、営巣が確認されると自治体への連絡と協力要請、土地所有者への事情説明と保護のお願い、②「捕食者」対策では、カラスや猛禽類の捕食圧で、過去には数百巣のコロニーが全滅(!)したこともあり、試行錯誤の繰り返し、③「攪乱」対策では、営巣適地はヒトにとっても絶好の遊び場なので、同じく事情説明…。そして営巣状況調査。こうしてあつという間に8月を迎えることになる。

そんな中、千葉市や東京都大田区などでは、コアジサシのための恒久的な営巣地が造成され、市民団体・自治体・企業・研究者による協同でのコアジサシ保護が展開されている。より有効性の高い保護対策の検討を行なう上でも、様々な分野が集まって保護活動が進められていくことは、大変喜ばしいことである。また、保護団体同士のネットワークによる情報共有によって、個々の活動による保護から地域全体の保護へとつなげていく事が望ましい。

5. 引用・参考文献

Cramp, S. 1985. The birds of the Western Palearctic, Vol.4, Terns to woodpeckers. Oxford University Press, Oxford.

Olsen, K. & Larsson, H. 1995. Terns of Europe and North America. Princeton Univ. Press.

鳥羽悦男. 1989. コアジサシのおけるつがい外交尾. Jap. J. Ornithol. 40: 149-150.

Wetlands International. 2002. Waterbird Population Estimates - Third Edition. Wetlands International Global Series No. 12, Wageningen, The Netherlands.

執筆者

松岡好美 東京大学農学生命科学研究科 研究生

2003年より卒論、修論で3年間コアジサシの研究をしていました。振り返ると、家族も巻き込み、それぞれが観察する営巣地！があるという年もありました…。懐かしいです。そして、まさにこの原稿を書いている今も、近所の工事現場にコアジサシが営巣してしまい、なんとか保護してもらえないものかと心配の種は尽きません…。今後も未永く、コアジサシと関わることになりそうです。



千葉市検見川浜コロニーにて